瀬音（せおと）

1

奈良の山の辺の、この辺りは穴師の里と呼ばれている。
爽やかな春風に身を任せながらあたりの地道をゆっくりと歩く三つの人影がある。
三人はつい先ほど車谷の家を後にし、三輪山を右手に穴師山を前方に見ながらゆっくりと北に向かっている。先を行くのは父親らしい還暦をかなり過ぎたと思われる白髪の男、それを追う娘らしい三十過ぎの女が、小さな女の子の手を引いている。
女の子はきょろきょろと周りの景色に気を取られて足もとが危なっかしい。
朝方の冷え込みが緩み、霜柱が解けて道のあちこちに泥濘ができている。
「足もと気をつけるのよ、美香…」
娘は女の子の足もとを気遣って声をかける。
うららかな春の日がもうすぐ三輪山の頂にかかろうとしている。
「お父さん…」
思い出したように娘は父親に声をかける。
「どうした…、由佳里」
父親は娘の由佳里をふり向いて尋ねる。

「お父さん、あのお家のね…」
「ああ、あの車谷の家のことか？」
父親も孫の美香の足もとが気になるらしく、後戻りをして由佳里に代わって美香の手を引く。
「何という川なの、あの裏を流れている小川…」
その父に由佳里は尋ねる。
「ああ、あの川か、あれは巻向川、このあたりでは穴師川とも呼ばれているがね…」
父親は美香の手を引きながら、穏やかな笑顔で答える。
「あの川のせせらぎの音…」
「うん」
「心地よかったわ昨夜は、せせらぎの音を聞いているうちに自然と眠りに落ちて、久しぶりにぐっすりと眠ったわ。東京ではもうせせらぎの音なんか聞けないものね…」
しみじみと由佳里が言う。
「それは良かった…、初めての人は川の瀬音が気になって眠れないって言う人も中にはいるけれどね…」
父親はなおも美香の足元を気使いながら、
「あんな小さな小川だけど、万葉にも歌われた川でね、
“ぬばたまの夜さりくれば巻向の川音たかしも嵐かも疾き”

とか、
“巻向の山辺とよみて行く水のみなあわのごとし世の人われは”
などと柿本人麻呂が詠んでいるように昔はもっと水量も豊かだったのだろうね。今でも大雨が降ると水かさが増し、瀬音も随分と大きくなるよ…」
三人が行く地道の脇に広がる畑の一角から農夫が使う耕耘機の音が聞こえてくる。
辺りは柿やミカンを栽培する果樹園や田圃や畑が入れ混じって広がるのどかな田園地帯で、あちこちに白いビニールを張った蒲鉾型の農業用ハウスも点在している。
「この子ね…」
由佳里は美香を振り向きながら、
「少しばかり喘息の気があってね…」
と理香の体調を気遣う。
「おや、知らなかったね。昨日も、一昨日もそんな兆候は感じなかったれど…」
と驚く父親に由佳里は、
「合っているんだと思うわ、この辺りの自然に囲まれた生活が…、かといってお父さんのようにあの世田谷の家を捨てるなんて思いきったことも中々できないし…」
話が自分の昔に向かいそうになるのを父親は穏やかな笑顔で反らしながら
「もし良ければ、私がしばらく預かってもいいんだがね、この子を…」
そう話す父親に、由佳里は呟くように言う。

「そうもいかないのよ、美香は入学式を三日後に控えているから」
「おや、もう小学校へ入学か、そんなになるかね、あれから…」
父親は感慨ぶかそうに言う。
週末や祭日にはハイキングの人の姿が絶えない、この山辺の道も、今日は休日明けなので人影がほとんどなく、あたりは閑々としている。
「ほんとに豊かね、この自然は。お母さんも連れてきてあげたかったわ。ここに…」
その由佳里の言葉を引き取るように、
「とても無理だったろうね、それは…」
と父親、
「どうして？」
由佳里は尋ねる。
「だって、綾子はあれだけ怒っていたんだから、私が病院を辞めると言ったとき…」
「確かにあの時はね…」
由佳里はその当時のことを思い出して頷いた。
その当時のこと…、それは由佳里が母の綾子の猛反対を押し切って家出同然の駆け落ち結婚をしてしばらく経った頃の森山家の家庭での出来事である。
家中がひっくり返った。そう言っても過言でないほど大騒動だった。
父は森山病院の院長の座を捨てるだけでなく、医師まで辞めて別の世界で生きていく

と言い出し、頑として譲ろうとしなかった。
いつも穏やかな父のそんな姿を見るのは由佳里は初めてだった。
それ以来、母の綾子は父と一切口を利かなくなった。
まだ中学に通っていた弟の孝男が一人でおろおろしていた。
孝雄の面倒を見るため。そんな理由で勘当同然の立場だった由佳里が家に戻れたのは、その騒動が幸いしたのかも知れない。由佳里の方も早すぎた結婚に失敗し乳飲み子を抱えていた。
父と娘の間でしばらく沈黙が続いたが、由佳里がまた父親に話しかけた。
「でもね、お母さんは心の底ではお父さんと一つ鞘に戻りたかったのよ、とくに晩年は…」
そう言って由佳里は父親の反応を窺った。
三人は霜どけの地道から、それに交差して山裾に向かう広い農道に出ていた。
その道を山裾の方に向かってしばらく歩いた所で、由佳里は道路の右手にある大きな石の碑を見つけ、足を止めた。
「お父さん、ここに何とかの宮跡って碑が立っているわ!」
と由佳里。
「そう、ここに景行天皇の纒向日代宮(まきむくひしろのみや)があったと考えられているんだね。この道を反対方向に少し下ると垂仁天皇の纒向珠城宮(まきむくたまきのみや)の宮跡の碑もあるんだよ」

と父は言い、
「左手を見てごらん」
と道路の反対側を指さした。
そこは、こぢんまりとした休憩所になっていて、ベンチの傍らに立派な案内板があった。由佳里は一頻りその案内版に見入っていたが、
「ここに纒向遺跡(まきむくいせき)って古い遺跡ががあったのね…」
と驚きの声を上げ、
「それにしても、こんなのどかな山里にこれほど大きな遺跡があったなんて…」
とても信じられないという顔つきで由佳里は嘆息した。
由佳里が見入っていたのは纒向遺跡の案内図で、そこには東西約二キロ、南北約一、五キロに及ぶ広大な遺跡の全体像を予想復元した図が画かれていた。
由佳里の言葉を引き取るように、父親は、
「そう、その纒向遺跡はいま私たちが立っているこの穴師の里から…」
と右手で指し示しながら、
「奈良盆地の中心部に向かって緩やかに傾斜するこの辺り一帯の土地を西に下って巻野内、箸中の集落、さらにはＪＲ桜井線や国道をまたいで東田、太田集落のあたりまでを含む広大な地域に広がって存在したと推定されている。昨日お前たちを案内した幾つかの古墳などはすべてこの遺跡の中だし、そのほかにも合わせると十基を越える

古墳時代前期と推定される古墳群が存在する。今も少しずつその発掘調査は続けられているが、何分ご覧の通りで、このあたり一帯は田畑や民家、それに下に行くにつれて商業施設などがあって、土地はほとんど私有地といて使われているので、新しい建築工事や開発行為でもない限りなかなか発掘の機会が得られないから、遺跡の全容の解明はまだまだ時間がかかるだろうね」

と二人に遺跡の説明をして聞かせる。

「お父さんもその発掘に加わったことがあるの?」

「そう、現在はもう現役を退いているが、この桜井市から天理市にかけては、この纒向遺跡の他にも幾つもの遺跡群があって、その中の幾つかの発掘調査には私も加わったことがある…」

父はそう言いつつ由佳里の方に向き直り、

「昨日お前らを案内した大きな前方後円墳を覚えているか?」

と尋ねる。

「ああ、あの大きな古墳、あれ箸墓(はしはか)って言ったっけ」

と由佳里、

「そう、箸墓古墳は倭迹迹日百襲姫命(やまとととももそひめのみこと)の墓とされているが、あれは前方後円墳としてはこれまで発見された中で一番古く、その築造時期が邪馬台国(やまたいこく)の卑弥呼(ひみこ)の死亡推定時期とほぼ重なっていると考えられることから、これを卑弥呼の墓とする専門家もいる」

と付け加えた。

「えっ、あれが卑弥呼の墓なの?」

由佳里はびっくり顔で父の顔を見つめる。

三人が腰を下ろしている木製のベンチから、奈良の盆地が一望の内に見渡され、春にしては　霞や靄もなく空気が澄んでいるためか、盆他の遙か西のはてに矢田丘陵や生駒山の峰々がははっきりとその姿を見せている。

「めずらしいね、ここから生駒山がこんなに綺麗に見える日は…、きっと遠来の客のお前らを歓迎してくれているのだろう」

と父親は笑い、

「ここからは見えないが、少し立ち位置を変えれば、盆地の南には二上山や葛城、金剛の山並みと、その手前に耳成山、畝傍山、香具山の大和三山をはっきりと見ることができる。この山の辺の一帯は、春が訪れると、梅に桃、それに早咲きの桜が重なり、山裾一帯はさながら花の絨毯を引きつめたようだし、花の季節が過ぎると若葉が濃淡さまざまの彩りに萌え出て、夏は夏ですだく虫の音、秋はそれこそ紅葉の綾錦、そして冬は冬で薄墨を刷いたような峰々のもの寂びた美しさ。古事記で倭建命（やまとたけるのみこと）が詠んだとされている“大和は　國のまほろば　たたなづく青垣　山こもれる　倭しうるわし”の和歌の、その“國のまほろば”こそ、この三輪山、巻向山、

穴師山に囲まれたこのあたり一帯の地域、つまり穴師の里から巻向一帯の地だと私は考えているよ…」
そんな祖父の説明をよそに、孫の美香はお腹がすいたらしく、母の由佳里の袖を引っ張り、
「お弁当食べたい」
とせがむ。
「ここでお弁当にしませんか、お父さん、眺めもいいし…」
と、由佳里はベンチの上に弁当の包みを開きかける。
その手を押し留めるようにして父親は、
「うん、ここもいいが、もう少しだからこの道をもう少し東に歩こう。どうしても案内したいところがある。お弁当はそこでゆっくりと食べよう」
そう言いながら父親は、由佳里と美香を促し、三人は道を東へ、山の裾野へと向かった。行く手の右側には三輪山が青々と端正なたたずまいを見せ、左手には穴師山がなだらかな稜線をえがき、裾野は色とりどりの若葉と桜のまだら模様を画き出し、二つの山の奥手にひときわ高く、そして青く巻向山が静かな姿を見せいてた。
道は山裾に向かって緩やかな登り勾配をなし、大兵頭神社の参道入り口の石の鳥居がもうあと少しという所に迫っていた。

2

「これはまあ、何と見事な桜なの!」
緩やかな登り道に息を少し荒げながら歩いていた由佳里が、思わず足を止めた。
大兵頭神社の石の鳥居の右手の杜が、見事な桜の森になっていた。
「ここがいいだろう。さあ美香ちゃん、この桜の森の中でお弁当にしよう」
そう言って父親はその右手の杜の中へと入っていった。
入り口にはもう一つ小さな鳥居があり、“相撲神社”と書かれていた。
中は小さな木の祠と石の顕彰碑があるだけで、草原のようになっていて無数の桜が広場全体を傘のように覆い、花の研を競っていた。
「ここはね…」
父親が二人の方に振り向きながら言った。
「相撲神社と呼ばれていて、日本書紀に垂仁天皇の時代に能見宿禰(のみのすくね)と当麻蹴速(たいまのけはや)に相撲を取らせ、その強さを競わせたとされる伝説の地なのだ。この杜も大兵頭神社の神域の一部なのだが、後世の人がここを相撲発祥の地として祭るようになって相撲神社という名がつけられたのだろうね」
「お父さんは毎年春になるとここの桜を見に来るの?」
と、由佳里が父に尋ねる。

「楽しみにしているんだよ、毎年ここで一杯やるのをね…」
嬉しそうに父親は答える。
そんな会話をしながら、三人は一番見事に咲き誇る桜の木の近くに敷物をしき弁当を広げた。
「これはまた随分とご馳走だね」
父親はそう言い、由佳里が広げたお重の弁当に一頻り感心していたいたが、
「どれ早速いただこう」
と弁当に一番箸をつけた。
美香も待ちかねたように、一番好きなだし巻き玉子を頬張り始めた。
「どうお父さん、お味は?、今朝早く起きて頑張ってこしらえたんだけど…」
由佳里は弁当のできばえについての父親の採点がちょっと気がかりな様子で、父を窺う。
「美味しいね…、手作りの弁当なんて何年ぶりだろう」
満足そうに父親は言い、それにしても、
「大したものだ、娘時代はやんちゃで通したお前が、これだけの弁当を作れるようになるなんて…」
またひと仕切り感心する。
「だってお父さん、私は美香の母親よ…」

由佳里は父親の言いぐさにやや不満めいた顔をしたが、そう言いつつも育った森山家の家庭を思い出していた。
「そう言えば、お母さんは料理なんて関心がなくて、滅多に台所に立たなかったし、あまり家庭的な女ではなかったわね…」
「それは、仕方ないだろう。綾子はあれだけの病院を親から受け継ぎ沢山の患者を抱えて医師としての仕事に追われていたんだからね…」
「お父さんはいまでも母の肩をもつのね…、ご自分が森山家へ養子として入った身だから?」
由佳里は父親にちくり…
「そんな訳ではないがね…」
と父は苦が笑い。
「可哀想ね、お父さんて、この歳になって私つくづくそう思うようになったわ…」
「お前も綾子に反抗して家を飛び出してから、かなり苦労したようだね」
「あの時はお父さんにも心配かけたわ、ほんとに申し訳ないと思ってる…」
「謝るのはむしろ私の方だよ、何しろ人生半ばで医師も、病院も、家庭もすべて投げ出してしまったんだから…」
「もう何年になるの?、ここに住み始めて…」
「この車谷に移ってからでも、もうざっと十五年近くなるだろうね…」

「たしか橿原だったわね。東京から移り住んだ当初は」
「そう、研究施設から近かったからね」
「でも、お父さんてほんとに変わり者ね、大学の医学部を出て、医学博士の学位までとって、折角森川病院の院長の座におさまりながら、人生さあこれからっていう時期に、そのすべてを擲って畑違いの世界に飛び込むなんて。考古学なんて唯の土堀りの仕事でしょ…」
唯の土堀り、の言葉に父は苦笑いしながら、
「まあ、それには違いないがね…、その土堀りの仕事に学生の頃から惹かれていてね、それがもうどうにも辛抱できなくなってきて、ついあんな形で医師の仕事を抛りだしてしまったのだ…」
「私、びっくりした。お父さんが院長を辞めて考古学の仕事に就くって言い出した時は…」
しばらく会わない間にすっかり白髪頭になった父を見ながら由佳里はしみじみと言う。
「もともとやりたいと思っていた仕事だから、私の中ではいきなりって訳でもないだよ、それに…」
そう言って父は美味そうに一箸お弁当をつつきながら、
「医学の知識と経験は考古学の仕事にも全く無駄になったということでもないのでね…」

娘にいい訳をするように、父は考古学の世界で医学の知識がどのように役にたつかということを説明して聞かせた。
「お父さんが病院を辞めてから、お母さん、随分と大変だったみたいよ…」
「院長も兼ねることになって経営のことも考える必要があるしね。もしかするとお母さんがあんなに若く亡くなったのも、私の精かもね…」
「そうとも言い切れないと思うけど、要は医者の不養生ってやつじゃない…」
満開の桜の下でお弁当を食べながら、父と娘の話が続く。

＊　＊　＊

由佳里の父、森山慎三は東京にある大学の医学部を卒業し、そのまま大学の医局に残って研究生活を送っていた。妻の綾子は東京の世田谷で森山病院を経営していた父の一人娘で、慎三と同じ大学の医学部に学んでいた。学年は慎三より三年下であった。二人が親しくなったのは綾子が慎三の所属する医局に入ってきてからのことである。男子系の大学の医学部で女性は目立つ存在で、綾子には何人もの男性との噂があった。その精かどうか、入局してしばらくは、綾子は慎三に鼻もかけなかった。
そんな綾子が慎三に急接近してきたのは、綾子が入局して三年あまり経ってからのことである。それまで女性との縁がほとんどない慎三が、美人で活発な綾子を好きになるにはそれほど時間はかからなかった。社交的で、でしゃばり屋の綾子と違い、慎三はというと、医局でも地味で目立たない存在で、趣味といえば考古学や古代史とい

った畑違いのことに興味をもち、学部の違う考古学教室などに出入りしたり、ゼミに参加したりすることだった。
綾子が慎三に急接近してきた裏には、森山病院を経営していた綾子の父親が病に倒れて急逝し、跡継ぎがどうしても必要になったという事情があったのだが、それは後で分かったことである。それとは別に、綾子はもっと切羽詰まった事情をかかえていた。慎三が綾子からそれを打ちあけられたのは、婚約がまとまった後のことである。
その綾子が抱えていた事情、それは綾子がすでに誰かの子を宿していたという事実である。言うまでもなくそれは慎三との子ではない。
相手の名を綾子は明かさなかったが、どうやら綾子とは一緒になれない事情のある男性らしいという程度の察しはついた。悩まなかったという訳ではない。しかし、慎三は綾子との結婚を止める気にはなれなかった。どうせ子が生まれるのは綾子と夫婦になって後のことである。夫婦の間に生まれる子は夫の子である。世間がそう思うように自分もそう思えば良い。それだけのことだ…。それが思い悩んだ末に慎三がたどり着いた結論だった。それに、すでに慎三の気持はもうあと戻りすることができないほど綾子を愛し始めていた。「事実を誰にも漏らさない」それが結婚するにあたって綾子との固い約束だった。
だからという訳ではないが、慎三は由佳里を自分の子である。そう思って育ててきたし、今も自分としての愛情をもっている。しかし、ただ一つ、慎三が心を痛め続けてきたことがある。それは由佳里にその事実を何時、どんな形で伝えるべきかということである。

＊　＊　＊

弁当をつつきながら、その事をいま由佳里に伝えようか、そう慎三が思案していたとき、
「何を考え込んでるの？」
由佳里が心配そうに父の顔をのぞき込み、
「お父さんたら急に黙り込むんだもの、何かあったの？」
と心配そうに尋ねた。
「いやね、お母さんも幸せな一生ではなかったろうね、そんな気がしてね…」
と心とは別のことを言って慎三ははぐらかした。
すると由佳里は、
「そうかしら？」
と慎三のはぐらかしを真に受け、
「お母さんて、いつも自分が正しい、そう信じて何時も自分流儀で押し通してきた人よ、むしろ幸せな一生だったのじゃない」
と言い、
「そんなお母さんだったから、反抗して家を飛び出したのよ、私…」

そう言ってしまってから、
「身勝手な言いぐさになるかも知れないけど…」
と由佳里は言い繕いをする。
「もうよそう、その話は、せっかくの弁当が不味くなる」
慎三は由佳里の言葉を遮った。
「そんなお母さんも、亡くなる何年か前から人が変わったみたいになって…」
まだ言い足りなそうに由佳里はそう言って口をつぐんだ。
残り少なくなった弁当のお重の中にも、涙ぐむ由佳里の頬にも、一片またひとひらと花びらが舞い落ちてきた。

3

由佳里の許へ慎三の危篤を知らせる電話が入ったのは、そのわずか二ヶ月ほど後の深夜である。慎三が親しくしている友人からの一報だった。
慎三は自宅で吐血して倒れているのをその友人が見つけ、すぐ救急車を呼んだのだという。由佳里は慎三が運ばれたという橿原市内の病院とその住所とをメモし、翌朝一番でその病院へ向かった。
しかし、亜由美が病院に着いたときは、すでに慎三が息を引き取った後であった。

電話をくれた友人は由佳里が病院へ駆けつけるまでずっと徹夜で病院に詰めてくれていた。その友人の説明では、大量の吐血して倒れている慎三を発見したのは昨夜の午後八時過ぎだったという。倒れていたのは二ヶ月前に三人でくつろいだあの車谷の慎三宅の居間である。病院に運ばれた時にはすでに手遅れの状態で、慎三は程なく息を引き取ったという。
「好きだったからねー、何しろこれが…」
そう言って友人は杯を挙げる仕草をした。
その夜もいつものように友人と一杯汲む約束になっていたという。
医師の説明ではアルコール性と考えられる肝硬変がかなり進行していて、門脈圧亢進による食道静脈瘤の破裂による大量吐血が直接の死因だとのことであった。
「お父さんたら、あの桜の下で何か考え込んだりしていたから…」
由佳里はそう呟き、
「何か変だと思ったら、こういう事だったのね…」
由佳里は父親の遺体に取りすがって涙を流した。
病院を辞めたとは言え、慎三はもともと内科の医師である。
自分の病気がすでに予断を許さない状態にあることは自覚していたはずである。だからあの時、恐らくは自分の死を予感して何かの思案に耽っていたのに違いない。それにしても…、友人がたまたま発見してくれたから良かったものの、そうでなければ何

日間も血の海の中で倒れたまま息絶えていたはずなのだ…

「お父さんらしい最後だわ、誰にも何も告げないで旅立って…」

すでに冷たくなっている父の遺骸に取り縋りながら由佳里はそう呟いて涙に咽せた。

とりあえず病院から遺骸を引き取り、由佳里は慎三の車谷の自宅へ安置した。

救急車が呼ばれたことで近所の人は事態をいち早く知り、何人かは病院まで駆けつけてくれていた。通夜と葬式の万端は隣近所の人が段取りをし、すべてをぬかりなく取り運んでくれた。その中の誰かであろう、由佳里が喪主の席につくための喪服まで準備してくれた。常念寺という寺の住職をしているという慧証さんという和尚がかけつけてくれ、枕経をあげてくれ、通夜と告別式の導師も勤めてくれた。

慧証さんはかねてから慎三と懇意にしてきた間柄だそうで、慎三から死後のことを託されているという。その慧証さんによると、慎三は常念寺で毎年催される涅槃会、彼岸会、灌仏会、施餓鬼会、盂蘭盆会など、年に十数回の法会の後で、かならず、集まった人の前で、医学や考古学の専門知識を、その時々の社会の動きと結びつけ、易しく役に立つ講話にまとめて話してくれ、それが法会に集まる人の楽しみの一つになっていたという。

通夜や告別式にには車谷の集落だけでなく、穴師、箸中、巻野内の各集落や、中には太田集落や東田集落からも訃報を聞きつけて参列してくれた人もあり、由佳里が思っていたより盛大な営みになった。由佳里は次から次へと焼香する参列者の数の多さ

を見て、慎三がこの土地の人達にどれだけ好かれていたかを初めて教えられた。

告別式と初七日を一緒に済ませた後のお茶飲み話をする中で、慎三が由佳里に宛てた遺書を残しているはずだと慧証さんから教えられた。

告別式、野辺送りと初七日を終えれば葬儀も一区切りである。由佳里は父の遺骨を常念寺に預け、ひとまず世田谷の自宅に戻ろうかとも考えた。しかし、これから四十九日の満中陰まで、七日、七日の法事の度に世田谷から駆けつけるのも大変だし、慧証さんから聞いた遺書のことも気に掛かるしで、そのまま納骨が済むまで車谷で過ごし、父の遺品の整理をすることにした。

夜は父が使っていた夜具にくるまって寝た。なつかしい父の匂いが残っていた。夜具にくるまりながら由佳里はこれまで父親に対して、何一つとして娘らしいことをしてこなかった後悔の涙を流した。

翌日、由佳里は葬儀を手伝ってくれた家々への挨拶を済ますと、早速、遺品の整理にとりかかった。書斎の中は難しい専門書類で散らかり放題だった。何から手を付けて良いか分からず、とりあえずと思って机の廻りから整理し始めた。

真っ先に目についたのは本立ての中の何冊か日記である。そのほとんどは日々の仕事のことや、日常生活での出来事などを日々書きとめた、ごく普通の内容であるが、一冊だけ内容の異なるものがあった。その日記だけは記事が飛び飛びで、半年も一年近くも記載が飛んでいる所もある。それに中身を読んでいくと、それは由佳里や弟の

孝雄、そして希に妻の綾子のその時々の現状について詳しく記してあった。しかも、その日付は、週末や連休の時期と重なっているのがほとんどなのである。由佳里が離婚したこと、離婚後の生活、孫の美香の成長の様子、貴雄の日々の生活状況、妻の健康状態など、家族の事が時を追って事細かく書き込まれていた。医師を棄てて家族と別れ、奈良で一人住まいを始めてからも、慎三は休日になると上京し、気づかれないように家族の様子を確認していたのである。日記の中身にはその時、その時に確かめた家族の状況に、安心したこと、嬉しかったこと、心配なことの所感と共に、家族を捨てた自分を責める苦しい胸の内についての告白的な記述がかなりあることが目についた。日記は、昨年、由佳里が美香を連れて父の許を訪れた際に、娘と孫の美香に会えた喜びを詳しく綴った部分と、それに続いて由佳里への遺書を認めた記載で終わっていた。

読み終えて由佳里は言葉に出来ない思いで胸が一杯になった。気がつくと涙で頬が濡れていた。これまで、家族を捨てて好きな道に進み、気楽な一人暮らしを楽しんでいるとばかり思い込んでいた父が、胸の内にいつも捨てた家族への強い自責の気持をため込み、その辛さを夜々の酒で紛らせていたことを初めて知らされての娘の悔いの涙であった。

机の引き出しの中に漆塗りの文箱があり、何通かの預金通帳と印鑑、それにかなり分厚い封書が収められていた。通帳の中に一通、由佳里名義のものがあり、かなりの

金額が積み立てられていた。どうやら、自分の死後の由佳里の生活を心配しての気遣いらしい。

「お父さんたら、こんな心配してくれなくても…」

由佳里は溢れ落ちそうになる涙をハンカチで抑えた。

封書はまだ新しく、の名宛は「由佳里へ（親展）」となっていた。どうやら、それが慧証さんの話していた由佳里宛の遺書らしい。それを手にして由佳里はこの場で開封すべきかどうか、しばし迷っていた。

4

自筆の遺言を開封するには家庭裁判所で検認という手続きが必要となる。由佳里はそんなことをテレビの番組を見て知っていた。迷ったのはその精だが、封書はその体裁からして正式の遺言ではなく、いわゆる書書の類らしい。そう思って由佳里はその場で開封することにした。何より中身を早く知りたかった。封書の中には几帳面な字でびっしりと書き込まれた何枚かの便箋が入っていた。その内容は次のようなものであった。

＊　＊　＊

由佳里へ

私は由佳里にいつかは話さなければと思いながら、これまで話せないできた重大な事実をここに書き遺す。どうか動揺せず冷静に読んで欲しい。

その重大な事実とは、由佳里が私の子ではなく、綾子と別の男性との間にできた子であるという事実である。綾子との結婚が決まったあとで、私は綾子からその事実を告白された。それを告げられた時は驚きもしたし、悩みもした。綾子との結婚を諦めることも考えた。しかし、結局、私はその事をすべて腹の中に収めることにして綾子との結婚に踏み切った。思い悩んだ心の軌跡を述べれば切りがない。しかし、詰まるところ、生まれる子を私が私の子として育てればそれでよい。そのことに尽きる。世間には、子に恵まれない夫婦が他人の子を養子とし育てている例はいくらでもあし、中には子が授からずに産院から他人の子を盗み取り我が子として育てる例まである。それに較べれば、綾子のお腹の子は私と綾子とが夫婦になってから綾子が生む子なのだから、戸籍の上では紛れもなく私と綾子の間の嫡出の子なのである。

だとすれば生まれた子を私が実の子として育てていけばそれで良いわけだし、生まれてくる子にとってもそれが一番幸せなのだ。それに親と子の心の絆は血が繋がっているという事実から必然的に生まれてくるものではなく、親がその子にいかに親らしくあったかという事実によって少しずつ育まれていくものだからだ。私そう信じてほんとうの父としての愛情をもって由佳里を育ててきたし、その点は今も何一つ変わっていない。

しかし、私の思いや考えがどうかいうことと、由佳里が実の父の事を知る権利があるかどうかは別のことである。それは由佳里が決めることだ。それを秘し続けても、何かの偶然から由佳里がそれを知って悩むときが来るかも知れない。何も教えられないまま、そんな事実を突然に突きつけられれば、傷つくのは由佳里である。そうならないためにも由佳里にはやはりほんとうの真実を伝えておいてやる方が良い。そう思って私は何時、どんな形でそれを伝えるか、ずっと悩み続けてきた。しかし、そうしたくてもそれが実行出来ない事情があった。それには妻の綾子との約束である。

綾子は私と結婚するにあたって、生まれる子の秘密、つまり父親が夫である私ではない事実を終生他言しないことを堅く約束させた。綾子はそうすることが生まれる子にとって幸せだと言うのである。もしも、子が事実を知り、実の父親の許で暮らしたいとでも言い出せば辛い思いをするのはその子である。どうせ血の通わない継母の下で辛い人生を強いることになるに決まっている。綾子の言うことにも一理があった。しかし、由佳里が大きくなるにつれ、母親の綾子と意見が合わずに衝突し、反抗したり、家を飛び出したりといろいろな事があった。そんな中で、私は母に反抗する由佳里の心の底で何かその事に纏わるもやもやのようなものが原因しているのではないか。そんな気がしてならなかったし、それに、事実を他言しないことを私に求めた綾子の本当の理由が段々と分かってきたこともあり、私の心はまた事実を告げるべきだという方向に傾いてきた。

由佳里も知ってのとおり綾子は見栄張りで、自意識の固まりのようなところがあった。綾子がそれを隠そうとした本当の理由が、大森病院の院長の娘であり、自らも医師として、かつ父亡き後は病院の実質的な承継者でもある自分が、父無し子を生んだと世間から後ろ指を指されるのが嫌だったからで、真に由佳里の幸せを考えての事ではなかったことが、私には追々と分かったきたのだ。

その綾子も今はすでに鬼籍に入り、私が由佳里に事実を伝えることへの障害はなくなっている。なのに今まで私がそれを果たせなかった理由ははっきりしている。私は怖かったのだ。もし今になって事実を告げ、それで由佳里が私を避けるようになったらどうしよう。由佳里が私を嫌うのではないか。そんな女々しいことを考えていたのである。遠からぬ筈の死を前にしてまだそんな身勝手なことを考えていた自分を私は深く恥じている。どうか許して欲しい。

誤解のないよう一点だけ付け加えておく。

私が由佳里の真の父でないことを伝えるからには、実の父の名もここに書き加えるべきところである。ところが、私は由佳里の実の父親を知らない。綾子もそれを私に教えてくれなかったし、自らそれを調べたこともない。

由佳里がもしそれを知りたければ自分でそれを調べて欲しい。ただ、私が今でも由佳里は自分の子だと思って愛していることだけは頭の片隅に置いておいて欲しい。

この際、由佳里には他にも詫びておかなければならないことがある。

それは由佳里が高校に進学してから、良くない道に入り込みそうになった時期があった。そう言えば思い当たる節があると思う。あの時は私は随分と心を痛めた。しかし、心を痛めるばかりで父親として由佳里に何もしてやれなかった。

綾子は「あなたが由佳里を甘やかし過ぎるから」、そう言ってすべてを父親である私に責任を押しつけた。由佳里が私の実の子でなから遠慮して甘やかすのがいけないと綾子は言うのだ。その由佳里が看護学校へ進みたいと言い出した時は私はとても嬉しかった。やっと由佳里が自分の進むべき道を見いだした。それまでの道草も由佳里にとって決して無駄ではなかったのだと。そう思って胸をなで下ろしていた。ところが、妻の綾子がそれに猛反対したのは由佳里も知ってのとおりだ。今にして思えば、あの時、私は綾子の反対を押し切ってとことん由佳里の支えになってやるべきだった。私にそれだけの勇気と決断があれば、由佳里のその後の不幸な結婚や離婚という苦しみの人生を辿ることを避けられたはずだからだ。すべては婿養子として大森病院の院長の椅子を与えられている私の勇気のなさと至らなさが今の由佳里の不幸を導いた原因なのだ。これを由佳里にどう詫びれば良いのか私には分からない。

この際、綾子が看護学校への進学を反対した理由も明らかにしておくべきだろう。表向の理由は、医者の娘が大学も出ないで看護学校へ進むなんて世間に恥ずかしい。そんな所にあったが、実を言うと綾子の本音は別の所にあったのだ。由佳里が看護の勉強をするようになれば、いずれ私が実の父親ではないことを知る時がくる。その事を

何としても避けたい。ただそれだけの理由で、綾子は由佳里に文系の大学への進学を強要したのだ。

同じような事はその後もあった。それは由佳里の結婚のときだ。由佳里が大学二年の時に結婚したいと連れてきた相手、つまり後に由佳里が駆け落ちまでして結婚した美香の父親である。綾子は当然のように結婚に猛反対した。私は相手が画家志望という点で決して諸手を挙げての賛成ではなかったが、由佳里が望む結婚なら親として祝福してやりたかった。その事を巡って綾子と何度となく言い争いもした。でも綾子は「あなたは由佳里が実の子でないから簡単に考えるのでしょう!」そう決めつけて私を強く責めた。結局、私は綾子の圧力に負け由佳里を支えきれなかった。

結婚は二人の愛情の問題であって綾子が問題にするような家柄や世間体など無関係だし、相手の生活能力の点にしても、先々の事は誰にも分からないことで、どんな将来が二人を待ち受けているかは、その日が来てみないと分からない。明日が分からないという点では、たとえ由佳里が大学を卒業し、一流企業に就職した相手を選んで結婚したとしても同じことだ。

それに、若いときに経験する多少の苦労はむしろ人生にとって有益ですらある。あの時、由佳里の結婚に反対する理由は何もなかった。なのに、それが出来なかったことをここで詫びなければならない。

由佳里の結婚は結果的に失敗に終わった。しかし、その失敗はこれからの由佳里にと

って貴重な経験となってこれからの人生にプラスに生かされるだろうし、何よりも美香という、かけがえのない宝物をこの年老いた父に与えてくれた。これとて、あの時に由佳里が綾子の反対を押し切って結婚するという勇気に欠けていれば、今の私は孫の顔も見ることが出来なかったかも知れないのだ。

告白すれば、あの相撲神社の桜の下で、美香を膝に抱きながら由佳里の作ってくれた弁当を食べながら、私はうれしさのあまり心の中で嗚咽し、由佳里に手を合わせていた。思い返せばかえす程、私は由佳里にとって至らない無力な父親だったのに、お前は十二分にこの私に孝行してくれた。今は感謝の思いで一杯なのだ。せめてその偽りのない父の心の一端なりとこの遺書で汲み取った欲しい。

最後に…、これは要らぬ節介になるかも知れないが、老後の一人暮らしは侘びしいものだ。由佳里もまだ後家で通すには若すぎる。どうか一日も早く良い相手を見つけて再婚し、人生の再出発をして欲しい。今は由佳里の再婚に反対する者は誰もいない。美香もまだ幼く、父親が恋しい時期だろう。

長々と言い訳めいたことを書き綴ったが、最後に一つだけ、由佳里にどうしてもお願いしたいことがある。これは父の最後の願いなので、どうかもかなえてやって欲しい。その願いとは、私の遺骨は近くにある常念寺の墓地に葬って欲しいということだ。父はこの山辺の地に骨を埋め、この自然の中で眠りにつきたい。常念寺の住職は委細を承知してくれており、私の希望通り取りはからってくれると思う。だから私が死んだ

ときには、まず常念寺の慧証さんという住職に声をかけて欲しい。この事を由佳里に篤とお願いしておく。

私は医師を棄てたとは言え、自分の身体の異常については重々自覚している。私の肝硬変はかなり悪化しており、私の身に、何時、何が起こってもおかしくないところまできている。ここに書き遺したことは、本来ならすべて私が生きているうちに由佳里に話すべき事柄なのであるが、どうやらそれが叶いそうにもなく、こんな形でそれを由佳里に伝えることになってしまった、どうか許して欲しい。

平成二一年五月七日

森山慎三

＊　＊　＊

最後まで遺書を読み終え、

「お父さん!」

と思わず一言、由佳里はその場につき伏して嗚咽した。

5

穴師の里にまた桜の春が訪れていた。

慎三が亡くてからずっと閉じられたままになっていた雨戸が開けられ、なかから掃除

をする物音が聞こえ、父の一周忌の準備で、屋内を掃除し、風通しをする由佳里の姿がそこにあった。

「主がいなくなると家ってこんなに荒れるものね!」

雑巾がけをしながら由佳里は独り言を呟いた。

慎三の一周忌の法要を桜の時期に合わせて少し早めに営む、常念寺の慧証さんと打ち合わせてあった約束の日が明日に迫っていた。

「やぁ、由佳里さん、しばらくだね…」

通りがかりに声をかけた人がいる。

葬儀の時にお世話になった顔である。

「早いもんだね、あれからもう一年か…」

「その節はいろいろとお世話くださり、ありがとうございました」

由佳里が丁重に礼を言うのを手で遮り、

「明日は一周忌だね」

と、一人で頷きながらその人は去っていった。

当日、何の声がけもしてないのにかなりの数の人が法事に集まってくれた。

口伝えで地域のすべての家に伝わっているらしい。

慧証さんの読経がすみ、一周忌の法事が型どおり終わると、近所の主婦が総出で準備

してくれた料理と酒で精進落しの宴席が開かれ、故人の思い出話に一頻り花が咲いた。お酒やお茶の世話まで近所の主婦らがすべてやってくれ、由佳里はただ座っていれば良かった。午後一時に始まった法事がすべてお開きになったのは夕方の六時を過ぎていた。集まってくれた人々は宴席の後片づけまで綺麗に済まして帰っていった。

「これが田舎の暮らしなのだ…」

由佳里は思わず呟いた。

初めてこの車谷の家を訪ねたとき、「よくまあこんな淋しい辺鄙なところで…」とびっくりしたけど、こうして近所の人々がまるで家族のように何事も助け合う生活、それを知ってみれば、父が何故この地に定住する気になったのか、その理由が分かる気がした。

集まってくれた村の人が一人去り、また一人去って、ぽつんと一人だけ取り残された由佳里はあらためて小さな仏壇の前に座り、香を焚いて手を合わせた。

傍らには優しく微笑む慎三の遺影があった。

由佳里には遺影と同じ姿で優しい微笑む生きた父がまだそこにいるように思えた。

「お父さん」

その父に向かって由佳里は語りかけた。

「ほんとに気に入ったのねここでの生活が、お父さんは…」

由佳里の言葉に慎三がにっこりと頷いた。由佳里には思えた。

その慎三に由佳里はさらに語りかけた。

「お父さん…、あの遺言、何度もなんども読み返したわ…、あの中でお父さんは私がお父さんの本当の子でない事を私に告げなかったのを随分と気にしていたわね…」

そう言って由佳里は流れ落ちる涙を手で拭い、

「可哀想なお父さん…」

なおも流れ止まぬ涙をハンカチを出して押さえながら

「そんなこと、とっくに気づいていたわ、私、それも中学の時によ…」

そこまで言って由佳里は口を噤んだ。

微笑みの父の遺影の顔が驚きの表情に変わった気がしたのだ。

「驚いた？、お父さん：」

と悪戯っぽく笑いかけ、由佳里は尚も遺影に語りかけた。

「そんなことすぐ分かるじゃない。だって、私とお父さんの血液型とは合わないんだもの…、お父さんの医学部の同僚で親しくしていた人いたでしょ、村中さんて、そのまま大学に残って今は付属病院の院長をしているあの人…、お父さんには内緒にして申し訳ないけど、村中さんは何もかも教えてくれたわ…、だから私、何もかも知ってる、ほんとの父親の名前も、その人が今どこで何をしてるかも。知っていながら、それをずっと隠していたこと、私の方こそお父さんに謝らなければいけないわ。今、そ

れを教えようか、その人の名前を、その人お父さんもよく知ってる人、だってお父さんの昔の同僚だった人だもの…、でも、必要ないか、それって…、
だって私の父親はお父さんしかいないんだし、お父さんだってそれは同じでしょ…、
だから本当の父親なんて私には要らないの、いても赤の他人と同じよ、私には…、だから、何も気に病むことはないのよ、お父さん…、これまでも、これからも私の父親はずっとお父さん一人、他に誰がいるって言うの？、
それから、私が看護学校へ行きたいと言い出したとき、お母さんが反対したほんとの理由、あれはお父さんの遺言で初めて知ったわ。あれ読んで少し驚いたけど、それも、もうずっと前に終わった事じゃない…、お父さんも分かっているでしょ、お母さんてそんな人、プライドが強くて外面ばかり気にして、お父さんが優しいのを良いことにして家では我がまま通し放題で、自分都合の一方通行の生き方で通した人なの、私もお母さんの娘よ、おなじＤＮＡ継いでるから母さんのことは娘の私が一番良く分かる。だからかえって反抗したのね、あの頃は、そんなお母さんに…、でもね、おし父さん、解ってあげて、亡くなる前には随分と変わったわ、そんなお母さんが、その我がままな性格まで…、医者の癖して脳梗塞で倒れてしまって、根が自分勝手で我がままだから、少し回復するとすぐに無理して突っ走る。そうなるともうブレーキが効かなくなってしまう、だから二年ほどしたらまた倒れて、それからはもう駄目だった。身体の自由がきかなくなると惚けがきて性格まで変わってきたわ。私が付き添ってデイケア

に通ったりすると、まるで幼児みたいに無邪気になって仲間のお年寄りと一緒になってチーチーパッパを歌ったりお遊戯したり…、
そして私に聞くのよ、
お父さんは何処にかくれているの？、って…、
会いたかったのよ最後の頃は、きっと、お父さんに…、お母さん言ったわね、お父さんが医者を辞めると言ったとき
二度と私の前に現れないで！
って、それこそ鬼ような顔して、あんなに怒ってた筈のお母さんなのに…、それと…、そうそう、結婚の時のこと詫びてたわね、お父さんは、でも詫びなければいけないのは娘の私の方じゃないの！、親に反抗して意地を張って突っ走って、挙げ句の果てはご承知の通り惨めな離婚劇よ！、馬鹿な娘と思って許してね、お父さん…、お父さんが私に同情してくれていることは知ってたわ…、でもあの頃の私には、お父さんとお母さんは一体だったの、だって子供にしてみれば一組で親だもの…、だからついついお父さんにまで邪険に当ったりして…、あれがきっかけになったのでしょ、結局、お父さんが医者を辞めて家を出たのは…、お父さんをそこまで追いやったこと、今では反省してるわ、心から…、本当はね、お父さんに一言「ごめんなさい」って謝りたかったの、あの桜の花の下で…、でも、それが言えずじまいでこんな事になるなんて…、お父さんも遺書に書いてたけど、明日の事ってほんとに何も分からないものね…、そ

れなのに、誰も彼もが、その分からないってことを分かった積もりになって生きてるのね、だからどうでも良いことで人と争ったり、我を張り合ったり、人に負けまいとして力んだり、欲を張りすぎたりと…、馬鹿ね人間って生きものは…、私の事ならもう大丈夫よ、お父さん！、何も心配いらないわ、赤堤に出したあのお店も、お客さんが増えてきて段々と繁盛してきたわ、私のあとは美香が継ぐって言ってくれてるし…、それに病院の方も問題ないわ、弟の孝雄が後を継いで、患者さんもまた増えてきているみたい。お父さんの息子だからと、昔の患者さんがどんどん戻ってきてくれてるのよ。お父さんて患者さんにも優しかったのね…」

遺影に向かって語り続ける由佳里の独白を、巻向川の瀬音が優しく包み込み、やがて夜が深々と更けていった。

6

「今年も咲いたわね…、去年とおんなじ、自然って人を裏切らないのね」

由佳里にだけしか見えない父の笑顔に向かって語りかけた。

周りは満開の桜である。

去年、父と美香の三人で弁当を食べた、その同じ場所に由佳里はきていた。

一周忌を終えた翌日の昼下がりである。見事に咲いた桜の花をうっとりと見上げる由

佳里の頬に一枚、また一と花びらが舞い降りてくる。今年はどうやら開花が早かったらしく桜はぽつぽつ散り染めている。

「去年の今日よ、お父さん！」

由佳里は去年と同じ場所に父が座りいつもの微笑みで自分を迎えてくれているように思えた。

「早いものね、もう一年がたったわ、あれから…」

と由佳里が語りかけ、心の中の父がそれに頷く。

「これから毎年来るわね、この桜の下でお父さんに会うために…」

散りまごう桜の花びらを手で払うようにして由佳里は続ける。

「私、やっと分かったわ、あの車谷のお家に来て、そして巻向川のあの瀬音を聞きながら眠って、朝起きて山の空気を胸一杯に吸って、三輪山や巻向山、そしてこの穴師の山の姿を見ながらこの桜の花を見るために、ここに向かって歩くうちに、お父さんが遺言で「私はこの地で眠りたい」って書いた理由が…、そう言えば、去年ここへ連れてきてくれたとき、お父さん言ってわね…、「山の辺は、春がやってくると梅に桃、それに早咲きの桜が重なり、山裾一帯はさながら花の絨毯を引きつめたようだし、花の季節が過ぎると若葉が濃淡さまざまの彩りに萌え、夏はすだく虫の音」だった？、それから何て言ったっけ、そう、「秋は紅葉の綾錦、そして冬になれば薄墨を刷いたような峰々の寂びた美しさ」って言ったかな？」

人影のない相撲神社の草むらに座って独りごちる由佳里に桜の花びらが払っても払っても纏わり付いてくる。
「それに、何と言ってもこの相撲神社の桜と、巻向川の瀬音ね、とても優しいわ…」
気まぐれな風の悪戯したのだろうか、それまで静々と散っていた桜の花が、まるで桜吹雪のように一瞬空一杯に舞った。
「まるで夢の中にいるようね、この桜吹雪の見事さ…」
由佳里はなおも父に話し続ける。
「勝ち気で、負けず嫌いのお母さんと違って、お父さんは優しすぎたのね、あまりにも…、だから、医師の世界で生きていくのが嫌になったのね、きっと…、世間では医者と言えば、地位も名誉もあるし、それに収入も多いだろうって、人はみんな羨むけど、内実は厳しい世界だものね、仕事は結構厳しいし、気苦労も多いし、いろんな患者がいて泣かされることもあるし、その心身の過酷なまでの負担に較べれば、実入は世間が考えているほど良くもないし、それに、医師の業界って、娘の私が言うのも変かも知れないけど、妙な世界ね…、医師としての腕が良く、患者のことをとことん考えて治療していても、それで患者受けが良いとは限らないし、それとは反対に腕が今ひとつでも口先上手に患者をころがし、要らない薬をてんこ盛りに処方する医師の方に患者が集まったりするし、それに医者同士のつき合いも一筋縄ではいかないようだしね…、学閥や門閥だか派閥だか訳の分からないものがやたら幅を利かせたり、何々

会長とか、何とか委員とか、そんな肩書きとか地位とかがやたらと重宝されたり、その肩書だの、名誉だのを得るために妙な駆け引きや裏での取引、それを巡って裏で訳の分からない足の引っ張り合いがあったりと…、ほんとに妙な世界ね医者の業界って…、門外漢の私が傍で見てるだけでも嫌になるわ、何が本音か、何処に落とし穴があるのかさっぱり分からないところがあるみたいだし…、だから逃げ出したかったのね、お父さんはそんな世界から…、お父さんは、ただただ無欲で、優しくて、医者としての良心だけって人だから、人と競ったり、肩書や栄誉を人と争ったり、そのためにお世辞をばらまいたりすることが大嫌いだし…、それに、家庭では上昇思考に凝り固まって、上の方しか見ないお母さんから何時も尻を叩かれたりと…、それやこれやで大森病院の院長の椅子が耐えられなくなって、それで院長の地位も、医師の肩書きも、おまけに家庭まで投げだして、考古学だかなんだか知らないけど、土掘りの仕事を選んだのね。土が相手の仕事なら、何の気苦労も要らないし、それに土は正直で、人を陥れたり、嘘をついたり、人を裏切ったりしないから…、そうやって毎日あっち、こっちの土を掘りくり返して日々を送るうち、この穴師の里の自然に魅せられて、ここに住むようになったのね…、そしてここに住んでるうちに、この大地と自然と、そして土地の人情がとことん好きになって、それでずっとここで眠りたいという気になったのね…、大地も自然も、それに包まれたこの山村の生活も、大都会の薄汚れた空気や、やたらとせせこましくて一寸先が読めない都会での生活や人の営みとくらべれば、

とてつもなくのんびりして、大きくて、ゆったりと流れ、それでいて奥が深くて、あれこれと姑息な智慧ばかり巡らせる人のどんなはからいも、どんな大きな時代のうねりも、それこそ丸ごと飲み込んでしまい、過去も現在も未来もなく、すべてが永遠という糸でずっと繋がっているもの…、人と競い合うことばかり多くて、明日の我が身も読めない都会の生活から見れば、田舎暮らしのそれって、まるで夢の世界ね…」
いつの間にか涙濡れした由佳里の頬にも桜の花びらがほお飾りのように幾つも張りついている。その頬の涙を花びら飾りごと拭いながら、
「お父さん…」
由佳里はまた心の中の父に語りかける。
「これからは私もお父さんのように夢に生きることにするわ…、だって、せち辛いこの世の中で夢だけだもの、今日も昨日も明日もずっと繋がっているのは…、お父さんのように土掘りなんて私の性に合わないけど、高望みしたり、やたらに人と競ったり、欲を張って背伸びをしたりと、もうそんなことは懲り懲り、お母さんの生き方見ててよく分かったわ、その事は…、身の丈以上に背伸びしたり、必要もない肩肘張って、見栄ばかり取り繕って生きるのは、やはり良くないわ…、私のお店はこじんまりした小さな店だけど、あれでいいの、趣味を生かした手作りの小物類やアイデアグッズ、それに他の店が置かないようなファションとか、そういった類のものばかり並べあるの…、流行には一切媚びない品物ばかりよ、だって夢を売ってるんだもの…、何しろ

私と美香と二人が食べていければそれで良いのだから、欲張ることは何もないわ…、美香がもっと大きくなったら二人でお店に立つわ…」
そう言いながら、散り止まぬ桜をうっとりとながめながら、
「似てるのね、私…」
と由佳里にだけ姿の見える父の慎三に向かって尚も話しかける。
「当然だわね、だって私はお父さんの子なんだもの…、また来年お父さんに会いに来るわ、きっと、ここの桜が咲くころに…」
そう言って立ち上がり、帰り支度を始めた由佳里は急に思い出したように、
「それとね、お父さん…、あの遺言に、お父さん書いてたでしょう。良い人を見つけて早く結婚するようにって…、娘の私を気遣ってくれるその気持は有り難いけど、それだけは無理ね、いくらお父さんの遺言でも…、だって、私はもう結婚は懲り懲りだもの、きっと親に背いた報いね、これって…」
と言いかけ、
「でも…」
と言葉を継ぎ、
「もしも…、もしもよ、お父さん！、もしもお父さんのような優しい男性に巡り会えたら…、その時は、もう一度考え直してみるわ、私…」
そう言い残して立ち去ろうとする由佳里の髪にも肩にも、散り桜の花びらがまるで花

人形のように何枚も何枚も纏いつき、なおも纏い止もうとしなかった。

了